

校長を表敬訪問

④研修プログラムは、小水力発電に関する環境問題など、社会背景、小水力発電装置の技術内容から設置法まで小水力発電の推進に必要な分野全般

ミャンマーのタンリン工科大学と
の小水力発電に関する研修・文化交流
①プログラムの概要

タンリン工科大学はミャンマー最大の都市ヤンゴンに立地しています。起源は工業省下で1986年に設立された技術トレーニングスクールで、1999年に政府の工科短大に昇格、2007年に工科大学になり、土木、建築、機械、電力など9学科があります。日系企業が開発をしているティラワ工業団地に近く、我が国とは繋がりができる大学になります。

ミャンマーは無電化率が50%を超え、電気が供給されない地区が多くあります。この解消策に小水力発電の導入が考えられます。

今回、さくらサイエンスプランの支援を受け、土木工学科の教員1名、学部生2名の計3名を招き、小水力発電研修プログラムは、テーマに研修と交流を行いました。

宇野 浩
(阿南高専地域連携・テクノセンター特命教授)

阿南高専の活動報告

科学技術
振興機構

『さくらサイエンスプラン』友情と感激

第80回

に及んでいます。
さらに、本

校学生との交
流、徳島地場
企業の見学と
交流、LED

など日本の産
業を理解する
展示会の見学、
日本語研修な
ど、短期間で
すが密度の濃
いプログラムを
実施しました。

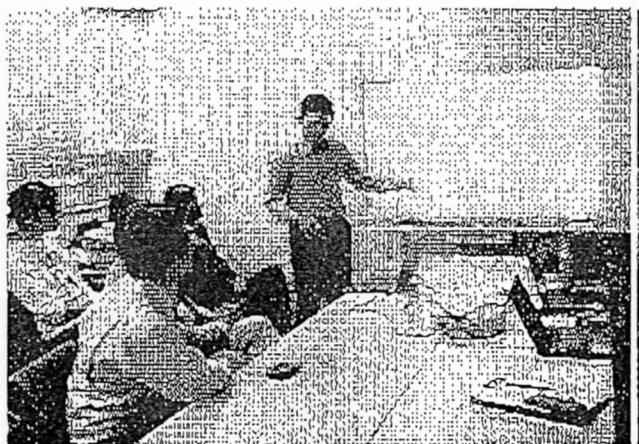
②プログラム
の成果

プログラム	
1日目	到着、関西空港～徳島市経由～阿南市ホテル到着
2日目	オリエンテーション、校内ツアー、校長表敬訪問、小水力発電学習
3日目	小水力発電見学、日本語教室、阿南市長表敬訪問、地場企業見学と交流
4日目	小水力発電学習、日本語教室
5日目	徳島県工業技術センター見学、徳島ビジネスチャレンジメッセ見学、学生と交流
6日目	研修成果レポートまとめ、研修成果報告会、学生と交流
7日目	鳴門親潮、四国88ヶ所1番豊山寺見学、阿波踊り体験
8日目	帰国 関西空港出発

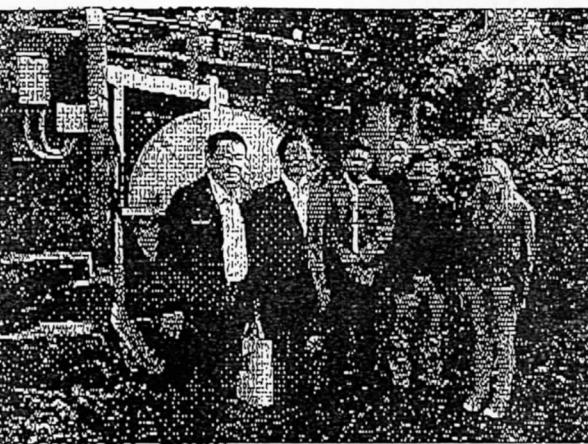
産業連携に繋げることもできました。また、ミャンマーに事業展開を希望する地場企業の見学・交流会も実施してクローバル化が期待できます。

なお、地元NHK徳島のニュース番組で小水力発電を見学研修している様子を取り上げた。小水力発電に関する環境問題、水車技術、太陽光・風力などのエネルギーとの比較、長所短所、装置の設置状況の見学まで研修しました。小水力発電の導入に関する研修が実施できました。小水力発電に関する研修が実施できました。小水力発電を普及させたいと力強く答えていました。

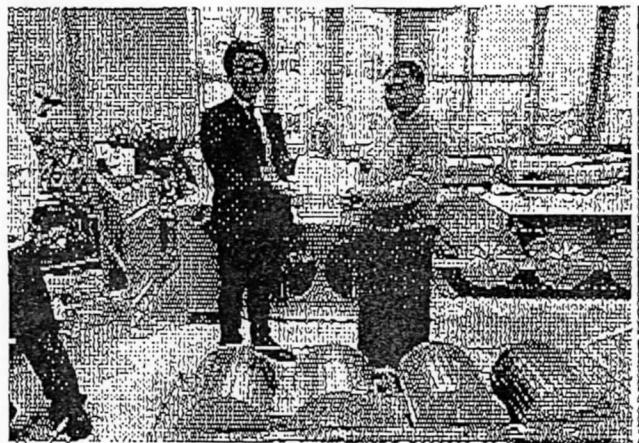
研修は、授業でのディスカッションに加え、毎日のレポート作成を義務付けたほか、帰国前に研修成果発表会を設け、研修レポートの提出とプレゼンテーションをしてもらいました。ミャンマーで小水力発電の設置候補地を選定し、その候補地に最適な水車形式と想定発



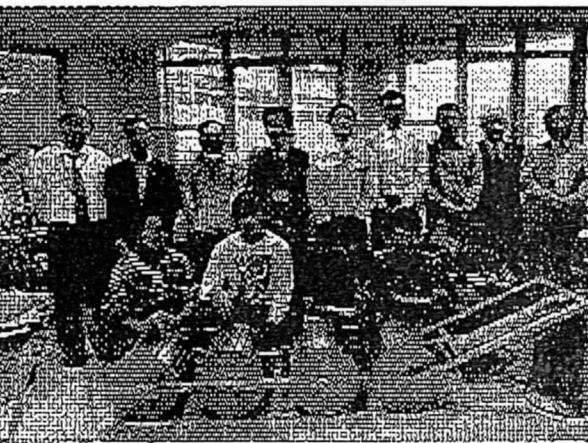
研修成果報告会



小水力発電装置の見学



寺沢校長④より研修修了証を交付



再生可能エネルギー研究会と交流

最後に、このように研修を実施するためご支援をいたいたいた科
学技術振興機構にお礼を申し上げます。

高専を軸に徳島地場企業と

マードの人才培养に貢献できることを望んでいます。

大学がグローバル産学連携をして、ミャンマーの人材育成に貢献できることを望んでいます。

また、阿南

マードに知れ渡つてほしいと望んでいます。

电量を検討した開発プランを発表してもらいました。それをもとに意見交換を行い、ミャンマーの無電化地域の解消に小水力発電は有効な手段であることを確認でき、充実した成果発表会になりました。発表会終了後に、校長より研修修了証を交付しました。

最終日に徳島の歴史や文化を通して我が国を知つてもう機会を設けました。研修テーマに関連する潮流発電に適した鳴門の渦潮の見学や、日本の民俗芸能として阿波踊り体験を行つたほか、四国八十八ヶ所1番札所靈山寺を見学しました。同じ仏教国として、お寺の構造、仏像の違いなど、文化的にも得ることが多い様子でした。

日本での生活を体験し、歴史、文化も理解できることに大変有意義であったとの感想を寄り参加した教員・学生は、充実した環境下で研修できたことに感謝の意を表すとともに、

日本での生活を体験し、歴史、文化も理解できることに大変有意義であったとの感想を寄り参加した教員・学生は、充実した環境下で研修できたことに感謝の意を表すとともに、

③受け入れ機関の成果

ミャンマーの大学とは、初めての交流でしたが、急速に工業化の発展が予想される同国と継続した交流の機運が高まりました。ラサ、英会話力の必要性を実感できました。ライン、フェイスブックのやり取りなど、アジアの友人との付き合いから国際感覚を身に付けてほしいと望んでいます。

さらに、ミャンマーで事業を計画している本校の助成会(ACTフェローシップ)会員である地場企業には、タンリントン工科大学とのグローバル産学連携への手がかりができました。

④将来の課題と展望

ミャンマーの大学と国際交流活動をより活発にしたいと考えています。高専は、中等教育後、5年間の技術者教育をするため、工業化の進展が著しいミャンマーに適した高等教育機関です。さくらサイエンスプランを活用した研修で高専の教育制度が広く、ミャンマーに知れ渡つてほしいと望んでいます。